

2018年「学力を伸ばす学校」 人気首都圏国公立大・早慶上智の受験指導に強みのある学校

TOP10

NO	学校名	④学力の伸び＝偏差値の差(③-①)		
		人気首都圏国公立	早慶上智	総合
1	東京都市大学等々力	18.0	11.3	14.7
2	宝仙学園	13.4	9.1	11.3
3	開智未来	14.9	5.8	10.3
4	桐蔭学園中等	15.3	5.2	10.2
5	茗溪学園	13.1	5.7	9.4
6	成城学園	10.0	7.9	9.0
7	大宮開成	10.3	5.8	8.1
8	田園調布学園	10.5	5.2	7.9
9	桐蔭学園	9.2	5.0	7.1
10	桐光学園	9.7	4.1	6.9

学力を伸ばすことに積極的に取り組んでいる学校

学校名	④学力の伸び＝偏差値の差(③-①)		
	人気首都圏国公立	早慶上智	総合
成田高等学校付属	3.8		

④学力の伸びは、中学入学時と高校卒業時の差を中学入試の四谷大塚の偏差値で表したものです。標準的な中高一貫校の④を"0"とすると、④が3.0以上の学校は顕著に「学力を伸ばす学校」と言えます。

「学力を伸ばす学校」の受験指導ノウハウを公開

桐光学園中学校・高等学校 入試広報部

他校との大きな違いは「男女別学」にあると思います。男子と女子は別々の校舎で生活します。異性を気にすることなく、お互いの伸びと学習できる環境が整っています。心身ともに急速に成長する思春期の男女の発達段階に即した教育方法を各教科で実践しています。男女の学習リテラシーやモチベーションの高め方、理解のプロセスは驚くほど異なっています。男女のそれぞれに特性に合わせた適切な指導が高い学力と資質を持った生徒育成に大きく貢献しているのではないかと思います。

本校は2人の専任教員がHR指導していく「二人担任制」をとっています。教科の異なる二人の教員が、それぞれの立場で生徒の学習状況を把握するようにしています。女子クラスは必ず2名のうち1名は女子教員が担当しています。そのため教員の数が206名(専任教員=169名・専任率=82.8%)ととても多いです。この教員の多さがさまざまな細かい教育活動を支えています。

中学1年生から中学3年生まで家庭学習の習慣を確立する目的で、2週間おきに毎朝、基本的な内容を確認する「10分間テスト」を実施しています。基準点以下の場合には、翌週の放課後に補習や追試などのフォローが行われ、基礎学力の定着に役だっていると思います。また、定期試験で思うような結果が残せなかった生徒を対象に試験後に「テストフォロー期間」を設け、出来なかった問題をやり直し、類題で再確認しています。早い段階で家庭学習の習慣を身に付けることは重要だと思います。

放課後には生徒一人ひとりの学力のさらなる向上のために、基礎力養成講座から最難関大学への現役合格を目標としたハイレベルな講座まで、年間600もの講習が設置されています。志望大学の入試問題を徹底演習することで飛躍的に合格力が身に着くのではないかと考えています。また、「パソコン活用術を教えます!」、「数学検定を取ろう」、「文章検定にチャレンジ」、「やきもの世界」、「オンライン英会話」といった生徒の知的好奇心や探究心を刺激する「ユニーク講習」も豊富です。

土曜日の4校時には、さまざまな学問分野で活躍する大学の先生方をお招きして「大学訪問授業」が行われています。先生方の熱い授業から参加した生徒達は大きな刺激を受け、将来就きたい職業や大学の学部学科選択を真剣に考え始めるなど、進路決定に大きな影響力を与えていると思います。それが受験勉強への原動力にもなっていると考えています。

これらのプログラムが生徒たちの学力を伸ばしていると思います。

成田高等学校付属中学校 入試広報部

子供の成長については個人差があると考えています。

同じ学年でも四月生まれと三月生まれでは低年齢ほどいろいろな面で差があるのはよく知られています。

特に、読解力や論理的な思考は、本人の経験とともに成長に伴う精神的な成熟が必要だと考えています。

小学生の段階でその思考を持ち合わせている子どもがいる反面、その段階では未熟であっても6年間の中高の生活や学習において獲得していく子供もいます。様子の変化を見てその成長を感じとり、適切な時期に生徒本人に自覚させることによって、より意識させながらその発達を促がすことを心掛けて親や教員が見守っていることが必要です。本校ではその見守りと働き掛けのタイミングを見逃さないように意識しています。

本校では国公立大学について強みがあると評価いただいておりますので、そのことについて本校が実施している指導のなかで関係がありそうなものを列挙します。

- ・高1(付属中生は中3)から国公立関係なく大学見学やオープンキャンパスへの積極的な参加を促し、レポートの提出をさせています。これをきっかけに大学では何を学び、研究をしたいかをよく考えるよう面談などの機会を活用し伝えています。

- ・理系を中心に、4年間ではなく、修士課程もあわせて6年間研究し、社会に貢献できる人材になるよう伝えています。その結果、目的意識を強く持つ生徒の多くは自然と少人数で時間をかけて研究に取り組める国立大学を選ぶ傾向があります。

- ・教員資格の取得の関係もあり教育学部志望者に国公立希望者が多くおります。付属小学校にて実際に授業に参加して、現場での取り組みを自らも実践を繰り返すことなど、ゼミ形式の学習会を行っています。それが小論文や面接試験で効果を発揮していると思われま。

- ・中学の段階で課題研究やプレゼンテーションでの発表などを通して身に着けた、「自ら課題を見つけ探求する姿勢」がAO入試でも力を発揮していると思います。(最新の2019年度入試では女子生徒が九州大学共創学部合格しました。)

- ・模擬試験や行事終了後などのタイミングで学年集会を開き、低学年では学習習慣の定着や分野別の弱点の把握、高学年では生徒職員が一丸となって大学入試に挑む意識を持つようにしています。

- ・低学年から試験前には職員室前に多くの生徒が訪れます。気軽に教員に質問できる習慣が受験期に個別の過去問の質問や添削指導などができる流れをつくっています。

- ・夏期の課外講座では、学年に関係なく受講できるので中学生が高校生向けの講座に参加することも可能です。

宝仙学園中学高等学校共学部理数インター 入試広報部

宝仙学園中学高等学校共学部理数インターは今年で12年目になる学校です。『理数』の意味は理数的思考力で論理的に考える力、『インター』はつなぐという意味でコミュニケーション力・プレゼンテーション力で、論理的な考えを相手に伝えることができる力の育成という意味を込めて『理数インター』というコンセプト名を付けました。

富士校長が校長に就任した4年前より『指導』から『支援』へ、教員の位置づけを変え、プレーヤーは生徒、コーチが教員、保護者は『サポーター』となり、生徒の自主・自立を伸ばす教育を行っています。

中学生では、入学したての生徒には『はじめからトップギアにいれない』をモットーに多様な入試で入ってくる生徒に対しゆっくりスタートします。また、同時に「失敗を恐れずに挑戦しよう」と声をかけ、挑戦を怖がらない生徒になってもらいます。そこからが「なぐさめ・はげまし・きたえる」の時期となります。失敗したら「なぐさめ、Next Chance!」モチベーションを削られず挑戦し続けると精度が上がってくるので、やがてうまくいく時があります。そういう時は、「You can do it!」と励まします。ただ、教育の本当の目的は、鍛えるということです。やればできるという感覚を持たせた生徒には「自己ベストの更新」を求め、今以上の自分になることを目標にしてもらいます。要は成長段階に応じて、生徒をよく見て対応するということです。中学では週37時間の授業があります。先取り授業をしていないので、じっくり定着を目標に取り組みます。

高校生へのアプローチは非常に難しいものがあります。『親や教員の言っていることを斜めに聞き少し拗ねている生徒』を基本設定とし、そういう生徒がどのような大人を求めているのかを考えます。彼らは自分をよく見て、話を聞いてくれる信頼できる大人を求めています。高校の担当は、信頼できる大人となることに努めます。また、教員は各教科のプロですので、難関大学の入試問題に対応できる準備ができていれば、生徒はスポンジに水が吸収されるように教員の話に耳を傾けます。

本校では、大学入試を受けるプロセスを大事にしているので、指定校推薦は出しません。また、高校2年生までは国公立対応のカリキュラムとなっています。自主自立を育む教育は難しいのですが、そういった姿勢が合格実績に反映されていると考えています。